

Z会東大進学教室

読解のための漢文法



出典：『孟子』「万章篇 下」 / 立命館大学 文学部 95年

書き下し文

伯夷は目に悪色を視ず、耳に悪声を聴かず。其の君に非れば事へず、其の民に非れば使はず。治まれば則ち進み、乱るれば則ち退く。横政の出づる所、横民の止まる所は、居るに忍びざるなり。郷人と処ることを思ふは、朝衣朝冠を以て、塗炭に坐するが如きなり。紂の時に当りて北海の浜に居り、以て天下の清むを待てり。

現代語訳

(潔白の士として有名な) 伯夷は不正を考える者を見ないようにし、不正な声を耳に入れようとはしなかった。そういう(自分が仕える価値のある公正で賢明な) 主君でなければ、仕えないし、そういう(自分が率いる価値のある知徳を備えた正しい) 民衆でなければ、(自分のもとで) 活用しようとはしなかった。(世の中が) 治まっていれば、その時は積極的に政治に力を貸したが、(世の中が) 乱れて(武力や内乱が増えて) いれば、その時は世を逃れ隠棲した。(暴君が即位し) 横暴な政治が幅をきかせている国や(武力で国を転覆させようという) 横暴な民衆が集まっている国は、住むのに我慢ができなかった。(礼儀をわきまえない輩である) 野人といふことを思うと、(まるで) 朝廷に出るとき衣装と冠を身につけて(正装したまま) 泥や炭(のような、汚いもの)に座るようなもの(で、自分が汚されてしまうよう)に感じるのであった。(殷王朝最後の残虐非道な) 紂王の時代に当たっては、(伯夷は世を逃れて) 北海の浜に住み着いて、そのようにして(その地で) 世の中が落ちつくのを待っていたのであった。

問 1

① 賢明な君主

② 横暴な民衆（暴虐な人民・乱暴な国民などでも可）

問 2

A ㊦

B ㊧

問 3

朝衣朝冠を以て、塗炭に坐する（が）ごとし（ごときなり）。

問 4

あたり（て）

書き下し文

夫れ小惑は方を易へ、大惑は性を易ふ。何を以て其の然るを知るか。虞氏仁義を招げて以て天下を撓せしより、天下仁義に奔命せざるは莫し。是れ仁義を以て其の性を易ふるに非ずや。故に嘗試に之を論ぜん。三代より以下の者、天下物を以て其の性を易へざるも、の莫し。小人は則ち身を以て利に殉じ、士は則ち身を以て名に殉じ、大夫は則ち身を以て家に殉じ、聖人は則ち身を以て天下に殉ず。故に此の数子者、事業は同じからず、名声号を異にするも、其の性を傷なひ、身を以て殉と為すに於いては一なり。

現代語訳

小さな惑いは進むべき方向を取りちがえ（るくらいですむものであるが）、大きな惑いは人間の本性を変えてしまう。どうしてそうなることがわかるか。それは（聖人といわれた）帝舜（有虞氏）が仁義の道をかかげて、仁義によって天下をかき乱してから後というもの、この世の人々は誰もが仁義を全うしようと懸命になっている。このことは、仁義によって、人間の本性を変えてしまったのではないか（、そうと言えるだろう。これこそ大惑というものではないか）。そこでこのことについても少し論じてみよう。夏・殷・周の三代以後というものは、この世の人々は、誰もが（利益や名誉などの）対象によって、人間の本性を変えてしまったのだ。（すなわち）庶民は利得のために身を犠牲にし、士は名誉のために身を犠牲にし、大夫は一家を守るために身を犠牲にし、聖人（「帝王」は天下をよく治めるために身を犠牲にしている。これらの身分の違う人々は、行うことはそれぞれ違い、名声（評判）もさまざまであるが、人としての本性をそこなって、その身を外物の犠牲にしている点では、みな同じである。

※これは、儒家の仁義の教えが人間の本性をそこなうものであるとして、道家の立場からこれを攻撃しているのである。

解答

問1 か

問2 (b) 仁義をまつとうしようと奔走しない者はいなくなった／誰もが仁義を全うしようと必死になっている〔別解例〕

(d) 名声(評判)もさまざまであるが

問3 A 〓(エ) B 〓(オ) C 〓(ア)

問4 (イ)

問5 (ア) 〓(イ) 〓× (ウ) 〓× (エ) 〓(オ) 〓× (カ) 〓(ク) 〓

解説

問1 単語の読みの問題。この問題の場合はヒントが隠されているので、相対的に難易度は低いはずだ。品詞を確定すれば容易に解ける。まず傍線部にレ点が付されていること、名詞「方」を下接していることがヒント。なお、「小惑易方」「大惑易性」が対になっているので、「易方」と「易性」の「易」は同じ意味を持ち、「方」と「性」が対になっていることから、「方」は名詞だとわかる。助字を伴わず名詞から返読するので、傍線部は動詞とわかる。それ以前に、傍線部には送り仮名がついていることに着眼した方が早いかもしれない。「易方」(連用形)の方では「へ」と「易性」(終止形)の方では「フ」と活用語尾が送られていることから、傍線部はハ行下二段動詞とわかる。

この「易」という漢字だが、形容詞では「容易」「難易」と使われ、「やさしい(やさシ・やすシ)」と訓読されるのは、よく知られているだろう。動詞では「貿易」「不易」として使われる。この場合の読みは「かえる・かわる(かフ)」である。したがって、答は「か」。

問2 傍線部(b)について。「奔命」＝「奔走懸命」の略。「しゃかりきになる」という意味。「莫不」は、間にレ点があるので、「莫」が

「不」を受けている。つまり、「莫不」は二重否定。直訳すると、「仁義に奔走しないことはない」となる。「仁義に奔走する」では、ちよつと言葉が足りない。「仁義」は普通、「仁義を全うする」「仁義を通す」のように用いられるので、例えば、「仁義を全うするために奔走する」というように言葉を補ってやる。

傍線部(d)について。「号」は、「呼ぶ」「名付ける」という辞書義を持っている。それは、「称号」「番号」という熟語の意味からも察しが付くであろう。ここから、傍線部(d)は、「名声はその呼称が異なっても」という具合の直訳になる。傍線部(d)の上の「小人……殉 C」がその具体例なので、「名声の呼称」の一つ一つは、名誉であったり利益であったりで、つまり、「名声と呼ばれるものの種類は異なるが」という感じになる。

問3 空欄を含む一文は、四つの句から成り立っている。この四句がみな「へ……」則以^レ身殉^レ X」という形で一致している点

に着目する。また、へ……へに入るのが「小人・士・大夫・聖人」と人物を表す名詞であり、かつ「小人」から「聖人」へと段階を追って階層が上昇している点に着目する。また、一箇所だけ空欄のない「大夫則以^レ身殉^レ家」によって、へ……へ^レの人物と X の語句との関係が捉えられる。すなわち、この X の部分は、へ……へ^レの人物が大切に守るべき(＝身をもって殉じる)対象となっているのである。なお、最初の「小人」は、四種類の人物を表す語が社会階層を示すものであるから、子供ではなく「庶民」の意味だとわかるはず。よって、「聖人」は、「君主」を意味するものと捉えられよう。

まず、「身をもって殉じる」対象になれない「自然」と「性」を選択肢から外してから考える。そして、残った選択肢を俗なもののから並べると、「利↓名↓天下↓神」となる。これを「小人↓聖人」の四段階に振り分けてやればよい。すると、「聖人」の場合、「天下」か「神」かの選択が必要になるはずだ。ここで、「殉^レ C」とレ点が付けられているからという理由で、「神」を選んではならない。

ここで「レ点」が用いられているのは、空欄に入るものが一文字であるからでなく、空欄を文字そのものと見做しているからである。この部分のレ点は、故意に振られたものではないだろうが、結果的には一種の引っかけになっている。

問4 この問題では文脈把握が必要になる。文章論理を追ってみる。まず「故嘗……論之」で一段落し、さらに論旨を深めようとして

いる。次に現れるのが傍線部を含む一文である。「莫不」という二重否定と末尾の強意の文末辞「矣」によって、これは主張を述べている部分と考えられる。次の「小人則……身殉」は、具体的な人物像を四種連続で列挙している点から具体例の提示部分だとわかる。最後の「故此数……殉一也」は、「故」という帰結を導く接続詞となる助字から始まり、「此数子」と直前の具体例を指示し、「其於傷性以身為殉」と主張と具体例を包括していることから、まとめをして確認している文とわかる。従って、「易其性」と「傷性」はほぼ同義で捉えられ、その結果として「以身為殉」のようになるものとわかる。ここから、具体例に返って、「此数子（小人・士・大夫・聖人）」が「以身殉」とする対象、つまり起点である四種類の「物」を見ればよいものとわかる。よって、「物」は、「利・名（≡名譽）・家・天下」となるので、この四点を集約できる選択肢を選ぶと、選択肢(イ)の「利欲や名譽」がつかめよう。問3と問4とは連動問題で、これを考える前提として問3の正解が前提になっている。

問5 選択肢(ア)は、「虞氏招仁義以撓天下」と同じ。よって本文に即している。

選択肢(イ)。本文は「大惑易性」という事象についてだけ述べているのに過ぎず、「大惑易性」だから「本来の性を大切にしよう」という提案はしていない。むしろ、本来の性を大切にしなければならぬという視点に立って本文は述べられている。よって、選択肢(イ)は本文趣旨ではなく、本文における『暗黙の前提（当然の前提）』を述べているものである。よって、本文をうがちすぎた叙述で、不適切となる。

選択肢(ウ)は、「小さな惑いも性を失う」が、本文の「小惑易方」と異なるので不適切。この選択肢は、本文の末尾一文の「此数子」が冒頭の一文を指示しているものと勘違いして述べられている叙述である。

選択肢(エ)は、「自三代……易其性」を要約したものであるから、本文に合致している。

選択肢(オ)は、「得た名声は同じ」が本文の「名声異号」に反するので不適切。

選択肢(カ)は、「傷性……殉一」と同じ内容の換言（具体化）なので、本文に合致する。

出典：楊銜之『洛陽伽藍記』の一節 / 法政大学 文学部 95年

書き下し文

白馬寺は、漢の明帝の立てし所なり。仏中国に入るの始めなり。寺は西陽門外三里、御道の南に在り。帝、金神を夢みるに、長は丈六、項背に日月の光明あり。金神号して仏と曰ふ。使ひをして西域に向かひて之を求めしめ、乃ち経像を得たり。時に白馬負ひて来たる。因りて以て名と為す。

明帝崩ずるや、祇洹を陵の上に起つ。此れより以後、百姓冢の上に或いは浮図を作る。寺上の経函今に至るも猶ほ存し、常に焼香して之を供養す。経函時に光明を放ち、堂宇を耀かす。是を以て道俗之を礼敬すること、真容を仰ぐが如し。

現代語訳

(洛陽にある) 白馬寺は、漢の(第二代皇帝である) 明帝が建てたものである。この時代に始めて仏教が中国に伝来したのである。

(白馬) 寺は(洛陽の) 西陽門から三里(ほど郊外に離れた)、御道(という通り)の南にある。(この寺の縁起は、次のようなものである。) 帝が金神を夢に見たが、(その神像の) 背丈は一丈六尺で、うなじと背中(に太陽と月が明るく光り輝いていた。金神は(自ら) 名乗って仏と言った。(夢から覚めた明帝は) 使者を西域に赴かせて、この仏を探させて、西域で経典と仏像を手に入れた。その時に(経典と仏像とを) 白馬が背負ってやって来たのだった。よって、その事跡にちなんで、(明帝は、この寺を) 「白馬寺」と命名した。

明帝が崩御すると、寺を御墓陵の上に建てた。それ以降(明帝にならって)、一般の国民の中にも、自分の墓(である土盛り)の上(に塔を立てるようになったのである。(白馬) 寺中の経典箱は今もまだ現存していて、いつも焼香して、供物をそなえて大切に扱った。経典箱は時々光明を放って、(白馬寺の) 伽藍を光で包んできらめかせている。そのために出家した人も在家の人も、この経典箱をまるで真仏の御姿であるかのように敬い拜んだということである。

問1 使いをして西域に向い、之を求めしめ

問2 (オ)

問3 日仏

問4 (オ)

問5 お経の入っている箱を敬い拝む様子は、まるで仏の真の姿を敬うようであった。〔解答例〕

／ 経典箱をまるで真の仏の御姿であるかのように敬い拝んだのだった。〔別解例〕

書き下し文

魏の周宣、字は孔和。善く夢を占ふ。或るとき宣に問ふ者有りて曰く、「我、芻狗を夢みたり」と。宣答へて曰く、「君、当に美食を得べし」と。未だ幾ばくもせずして、復た曰く、「芻狗を夢みること有り」と。曰く、「当に車より墜ち脚を折るべし」と。尋いで又た曰く、「芻狗を夢みたり」と。宣曰く、「当に火災有るべし」と。後皆言ふ所の如し。其の人曰く、「吾、実は夢みざるなり、聊か君を試すのみ。三占同じからざるに、皆、験あるは何ぞや」と。宣曰く、「意言に形るれば、便ち吉凶を占ふ。且つ芻狗とは、神を祭るの物なり。故に君初めに之を夢みたりと言ひしとき、当に美食を得べきなり。祭祀、既に畢れば、即ち轆く所と為る。当に車より墜ちて傷折すべし。車に轆かるるの後には、必ず載せて以て樵と為す。故に失火すと云へり」と。

現代語訳

魏の国の周宣は、字を孔和といった。巧みに夢占いをした。ある時、周宣に尋ねる者がいて、「わたしは芻狗を夢に見た（この夢を占うとどうですか）」と言う。周宣は答えて言った、「あなたはきっと美味なご馳走が食べられるにちがいない」と。その後幾日もたないうちに、また（その人が）言った（「わたしは）芻狗を夢に見ました」と。（周宣はそれに対して）言った、「あなたはきっと車から落ちて足の骨を折るにちがいない」と。まもなくして、（その人が）また言った、「（わたしは）芻狗を夢に見ました」と。周宣は（それに答えて）言った、「きっと火事がおこるにちがいない」と。その後には、すべて（周宣の）言った通りになった。その（芻狗を夢に見た）と言った）人が言った、「わたしは実際は夢を見たのではなく、ちょっとばかりあなたを試しただけなのだ。（それにして）三回の夢占いはそれぞれ違っているのに、すべてが占いの通りになってしまったのは、なぜですか」と。（これに対して）周宣が言った、「（運命をつかさどる神の）意思は、人の言葉の中に現れ出るのです。それで吉凶を占うのです。そのうえ芻狗という物は、神を祭るときの道具です。だから、あなたが最初に芻狗を夢に見たと言ったときには、きっと美味なご馳走が食べられるにちがいないと言ったのです。神の祭りが終わった後では、（芻狗は）人々に踏みつけられてしまいます。（だから、あなたが次に芻狗を夢に見たと

言ったときには) きっと車から落ちて骨折するにちがいないと言ったのです。(芻狗は) 踏みつけられた後は、必ず車に乗せていって、枯れ草として燃やします。それで(あなたがその次に芻狗を夢に見たと言ったときには) 火事がおこると言ったのです」と。

解答

問1 3

問2 (a) || いささ(か) (b) || すなわ(ち)

問3 (1) || いまだいくばくもせずして(「いまだいくばくならずして」でも可)
(2) || のちみないうところのごとし

問4 5 問5 3

解説

問1 空欄を補充する問題。前後の内容から、話の流れにあう語を選択肢から選ぶ。空欄を含む「□占不レ同」は、「其人」の言葉である。「其人」が発言する経緯を冒頭から追う。夢占いに秀でた周宣に、ある人が「私は芻狗を夢で見た」と尋ねる。これは、当然「この夢を占うとどうですか」という意味である。そこで、周宣は答える「あなたは、おいしい食べ物を手に入れるに違いない」と。この後、この人は周宣に二度、つまり、合計三度、「芻狗を夢で見た」と、同じ夢を占わせている。しかし、周宣の答えは、三度とも違っているのである。そこで、空欄を含む部分を発言するのである。これをふまえると、空欄の直下の「占」とは、周宣の「夢占い」のこととわかる。それが「不レ同」だと言っている。空欄には、選択肢から数詞が入るとわかる。周宣が、三度違う「占い」を答えているのだから、ここは、「三占不レ同」とわかる。

問2 単語の読みの問題。送りがなをヒントにできる。(a)「聊」は「少しばかり」という意味。(b)「便」は「ち」という送りがなから、「すなわち」だとすぐにわかるはず。「すなわち」と読むいくつかの漢字と、それぞれの表す意味の関係が頭に浮かぶだろうか。頻出する。

簡単にまとめると、「則」「即」とは、とても近く、「便」もこれらに近い。しかし、「乃」は、これらとは正反対である。また、「輒」は特別の意味を表す。テキスト要点部分を参照してほしい。

問3 白文を書き下し文にする問題。このような問題の場合、必ず、再読文字や句法といった、特殊な働きをする語が含まれているはず。まずそれを見つけ、後は、その読み方のセオリーどおりに読んでいく。そういう語が見つからない場合は、述語を探し、その文の文型を見極める。

(1)は、「未」という再読文字に着眼して考えることもできようが、実は「未」幾で「まもなく」という意味の慣用表現である。読み方は、「幾」にサ変動詞を付ければ「いまだいくばくもせず」となり、断定の助動詞を付ければ「いまだいくばくならず」となる。さらに、ここでは、(1)という文節は、後に続いていくから、最後に接続助詞「して」を付ける。

(2)は、「如」と「所」に着眼。「如」は多義語である。テキスト要点部分を参照してほしい。代表的なところで、「如^レA(名詞・名詞相当句)」という形なら「Aのごとし・Aのごとし」、「不^レ如・無^レ如」と否定語とともに使われていたら「し^カず・し^クはなし」、条件節の文頭にあれば「もし」といった読み方がある。さて、読み方を決めるために、「如」の後の部分を見てみよう。「所」が「言」という動詞の前に置かれていることに着眼。動詞の前に置かれている「所」は、その動詞を名詞化する働きがある。読み方は、下の動詞を連体形で読み、帰って「ところ」と読む。そこで「所言」の部分は、「いうところ」と読める。

「所」の働きのために、「所言」は名詞句である。すると、その上にある「如」は「ごとし」と読むとわかる。「所」という名詞から「如」に返って読むから、「所」に「の」という助詞を送り、「いうところのごとし」とがある。ここまで読めると、この文の述語は「如」であるとわかる。すると、述語の上の「後」「皆」は、いずれも副詞となる。

問4 白文を解釈する問題。文末に「何也」とあるのに、まず着眼。文末にある「何也」は、その前の部分を受けて、「()は」なんぞや」と読み、「()なのは」どうですか」と、理由を問う形である。ここから、選択肢は4・5のどちらかにしぼれる。

では、最初の「皆験」について考えてみよう。傍線部(3)は、問1で検討した部分に続く。つまり、「芻狗を夢で見た」と言い、周宣に三回夢占いをしてもらった人が、実は芻狗を夢みたというのは、周宣を試そうとした嘘であると告白する。そして、見た夢は同じなのに、三回の占いがいずれも違った、と言っている部分から続くのである。ここから、「皆」とは、「三度の夢占いのいずれも」という意とわかる。「験」は、「しるし」という意味で、判断の材料とする「証拠」の意にも、試した「結果」の意にも使われる。ここまでの話の流れから、ここでの「験」は、「夢占いの結果」の意味として使われているとわかる。したがって、5を選ぶ。

問5 解釈する問題。返り点が付いているから簡単である。「為_レ所_レ轢」と、「為_レ所_レ〈動詞〉」という形に着眼。これは、「〈動詞

(連体形)〉とところとなる」と読み、「〈動詞〉される」と訳す受身の句法である。ここから、すぐに3が選べる。